

人面装飾付釣手土器の再検討

渡 辺 誠

-
- 1. はじめに
 - 2. 分布の問題
-

- 3. 機能の問題
 - 4. おわりに
-

1. はじめに

筆者は人面・土偶（人体文を含む）装飾付土器のうち、すでに深鉢形土器・釣手土器・注口土器について、その基礎資料の集成と若干の検討を行なってきた¹⁾。これらのうち釣手土器については1995年に発表し、その後すでに10年を経過している。この間に当然ながら資料は若干増加している。また見落としもあった。本稿ではそれらの新資料などに基づいて再検討を試みることとした。検討の対象は次の2点である。第1は分布の問題、第2は機能の問題である。2点とも旧稿を訂正するものではなく、むしろその性格が一段と明らかになったことができる。

2. 分布の問題（図1）

旧稿では10例が知られていた。本稿ではこれに8例が追加される。旧稿の10例は次のとおりであり、すべて長野県下の出土例である。

- 1. 長野県北佐久郡立科町芦田遺跡
- 2. 同 小県郡長門町中道遺跡
- 3. 同 諏訪郡原村前尾根遺跡
- 4. 同 茅野市湯川上の段遺跡
- 5. 同 岡谷市海戸遺跡
- 6. 同 伊那市御殿場遺跡
- 7. 同 下伊那郡喬木村城本屋遺跡
- 8. 同 飯田市北田遺跡
- 9. 同 飯田市垣外遺跡
- 10. 同 飯田市箱川原遺跡

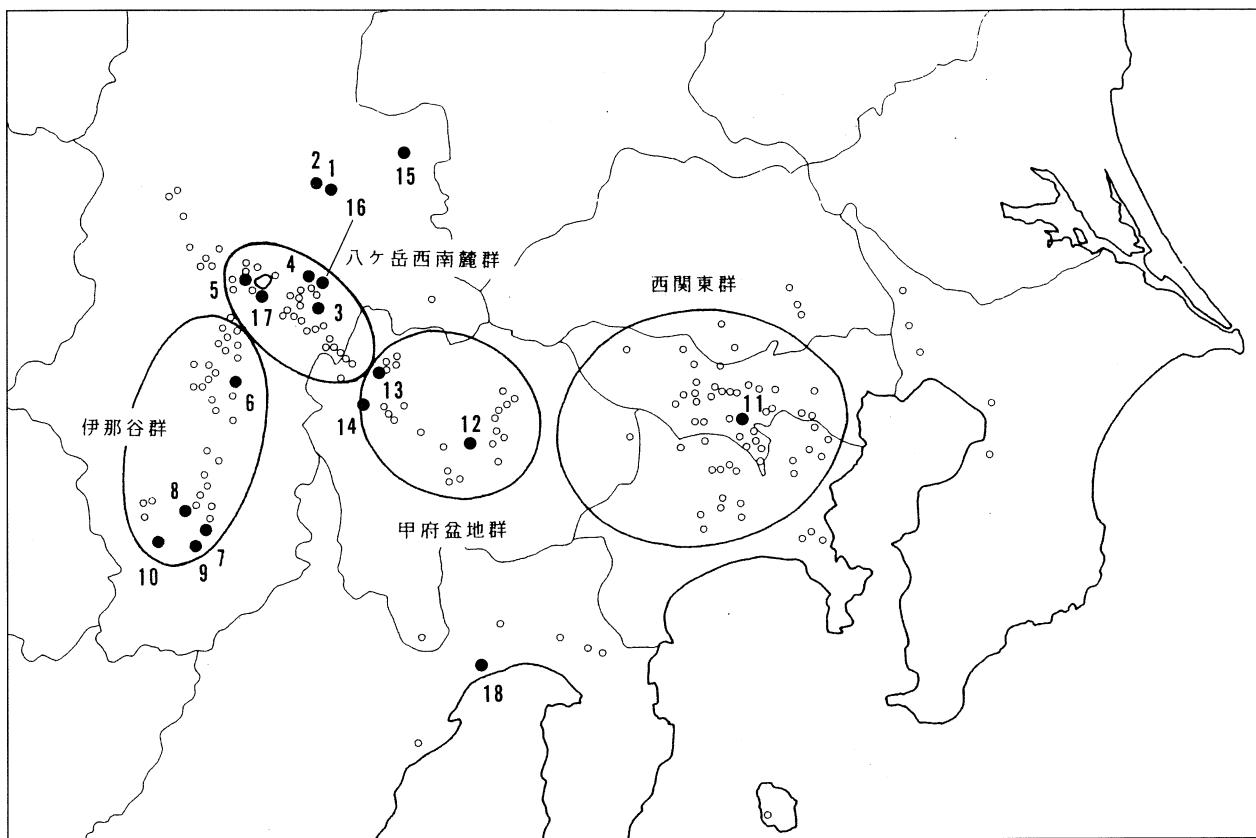
増加の8例は、長野県を含めさらに山梨県・東京都・静岡県にまで分布範囲を拡大している。本稿では旧稿との違いを明らかにする意味で両者を混合せず、通し番号を付することにする。これらを東寄り順番に記せば次のとおりである。

- 11. 東京都八王子市多摩ニュータウンNo.796遺跡例（写真1）

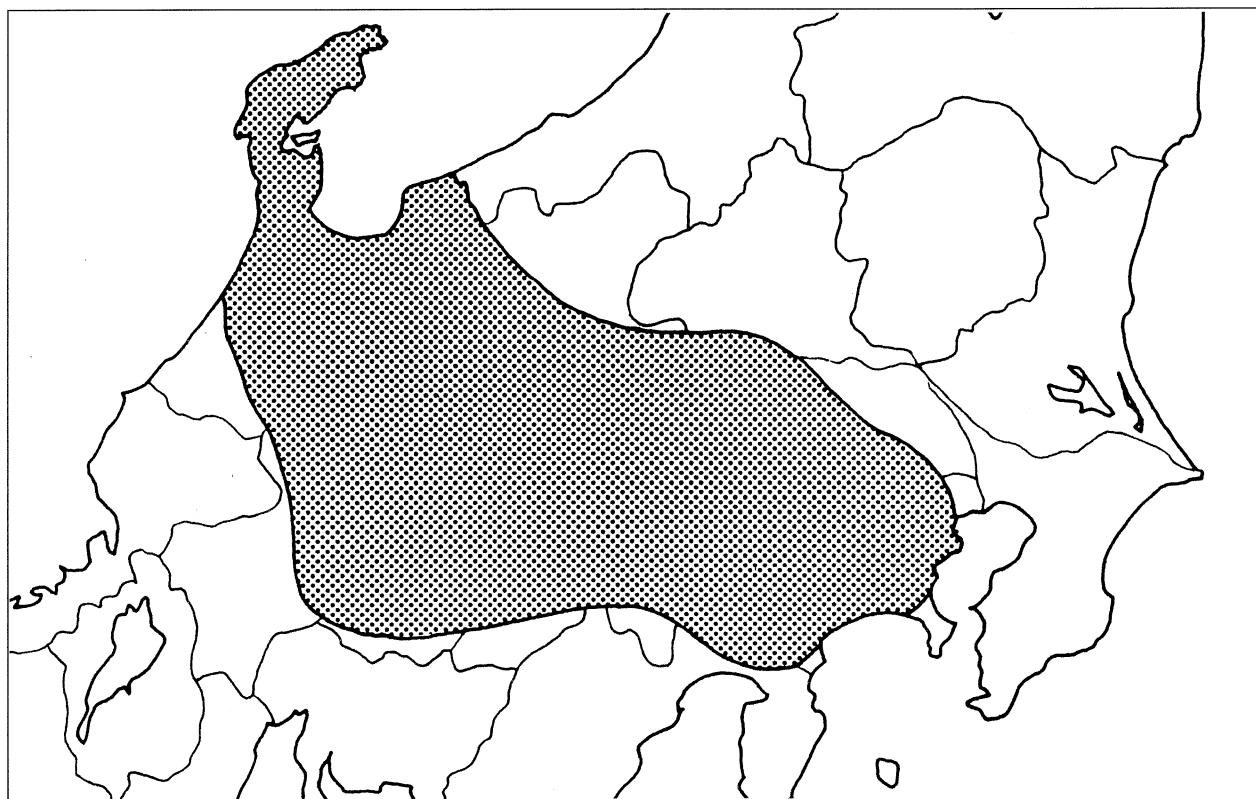
東京都埋蔵文化財センターの発掘資料。第7号住居址で、入り口よりみて左奥部床面より出土²⁾。釣手部分の破片のみで、鉢部分は復原である。復原高

21.2cm。頂部の人面は縦長で、長い隆帯で示される鼻の下に大きな口がみられ、鼻筋上の沈線、頬の列点も特徴的である。目のまわりは沈線が一周している。その上の眼窓上隆起は小さく、簡素な表現である。曾利E II式期。

- 12. 山梨県笛吹市（旧東八代郡境川村）金山遺跡例（写真2）
旧境川村教育委員会による発掘資料。住居址覆土より出土³⁾。底部は欠失し復原されている。大型で復原高48.6cmであり、人面部でも高さ12.1、幅17.6cmである。この人面部がすべて欠きとられていて、特徴的である。女神の死を象徴的に示しているところの、人面装飾付深鉢形土器に共通している。褐色～黒褐色を呈す。曾利I式期。
- 13. 同 北杜市（旧北巨摩郡高根町）社口遺跡例（写真3）
旧高根町教育委員会による発掘資料である。第13号住居址床面壁際より出土⁴⁾。高さ20.5cm。人面は小さく、隆帯で鼻と眉を表現し、裏面にも同様な人面がみられる。褐色を呈す。曾利II式期。
- 14. 同 北杜市（旧北巨摩郡武川村）真原A遺跡例（写真右）
旧武川村教育委員会による、発掘資料である⁵⁾。小型で、高さ15.5cm。頂部の両面に凸字状に人面がみられる。最頂部は欠失しているので眼窓上隆起は残っていないが、その下の目は横位の沈線2本で表現されている。隆帯で示される鼻は2孔をもち、その下の口は、目と同様な沈線1本で表現されている。黒褐色を呈す。曾利II式期。
- 15. 長野県北佐久郡御代田町宮平遺跡例（写真5）
御代田町教育委員会発掘による、未報告資料である⁵⁾。j-33号住居址覆土より出土⁶⁾。高さ27cm。大きな鼻の両脇の渦巻文は、目とみることができる。2個の鼻孔も大きく、その下に、口に相当するかのように縦の沈線がみられる。褐色を呈す。曾利II式期。
- 16. 同 茅野市聖石遺跡例（写真6）
長野県埋蔵文化財センターの発掘による、未報告資料。



第1図 人面・土偶装飾付深鉢形土器IV類（○）と同釣手土器（●）の分布（遺跡名は本文参照）



第2図 釣手土器の分布（註10文献より）

住居址内炉奥のピット中より出土。曾利Ⅲ式期。

小型で、高さ15.3cm。人面は横長で、中央に大きな鼻の隆起があり、これとは対照的に、小さな目が刺突

文でつけられ、鼻の下に縦の沈線で口が表現されている。両端には、耳飾を表す渦巻文がみられる。

17. 同 諏訪市荒神山遺跡例（写真7）



写真1 多摩ニュータウンNo.796遺跡例



写真2 金山遺跡例



写真3 社口遺跡例（旧高根町教育委員会）

長野県埋蔵文化財センターによる発掘資料。第96号住居址床面より出土⁷⁾。

釣手部の破片で、残存する高さだけでも23cmあり、本来大型であったことがわかる。眼窓上隆起はV字状を呈して鼻も表現している。同じような粘土紐で丸く目も表現しているが、口の部分ははがれていて不明である。褐色を呈す。井戸尻Ⅱ式期。

18. 静岡県榛原郡富士川町破魔射場遺跡例（写真8）

静岡県埋蔵文化財調査研究所による発掘資料。第3号住居址床面より出土⁸⁾。

最頂部は欠失しているのが、高さ15.5cm。眼窓上隆起は横位の沈線2本で表現されている。鼻部の隆起は欠失しているが、目と口は丸く粘土紐で表現されている。赤褐色。曾利Ⅲ式期。

以上の8例は、ほとんど中期後半（後葉）の曾利Ⅰ・Ⅱ式期に属す。そのなかで荒神山遺跡例は井戸尻Ⅱ式期に属



写真4 真原A遺跡例

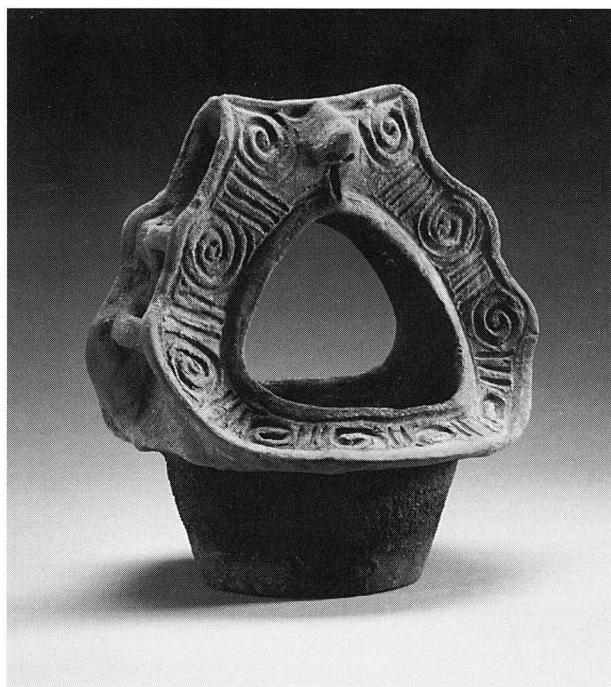


写真5 宮平遺跡例（堤 隆氏提供）



写真6 聖石遺跡例

しやや古く、逆に破魔射場遺跡例は曾利Ⅲ式期に属しやや新しい。

また旧稿ではその分布は長野県に限られていたが、今回の集成では山梨県を中心とした西関東から長野県にかけての範囲となり、人面装飾付深鉢形土器のもっとも発達したIV類と時期も近接し、分布も一致していることになった。

IV類は西関東群・甲府盆地群・八ヶ岳西南麓群・伊那谷群とに分けられるが、旧稿では後2群に4例ずつ分布して

いた。今回の資料を加えると、伊那谷群には増加はみられないが、各群はそれぞれ1・4・8・5例となる。後2群に多い傾向は変わらないとはいえ、IV類の範囲に近づいたことは、IV類と深い関係にあることが明らかになったが、釣手土器全体の分布（第2図）¹⁰⁾と比較すると、富山・石川県下では人面装飾付釣手土器はみられない点が問題で、将来の類例発見を期待しておきたい。なお本稿では、静岡県破魔射場遺跡例・長野県宮平遺跡例は、それぞれ甲

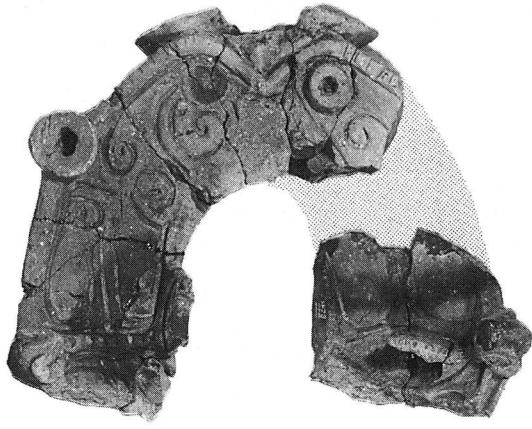


写真7 荒神山遺跡例（長野県教育委員会提供）



写真8 破魔射場遺跡例

府盆地群・八ヶ岳西南麓群に含めておくこととする。

3. 機能の問題

釣手土器は、故藤森榮一氏以来灯火具とみられていて、特に異見はみられない。しかしその内面には、意外と比熱や煤の痕跡が顕著ではない。長野県伊那市御殿場遺跡の釣手土器（写真9）について、飯塚政美・渋谷昌彦氏のご好意でその内面を詳細に観察したことがあるが、驚いたことに外側の前面が黒く焼けているのに対して、内面には火を受けた痕跡はまったくみられなかった。

この土器は身体に火を宿し、それによって身体を焼かれて人間にとて大切な火・食物などを生み出す女神の存在を示しているという、吉田敦彦氏による重要な指摘が行なわれて以来、人面・土偶装飾付土器研究の方向を決定した、学史的にも重要な資料である。

したがって内面に被熱痕がみられないことは一見矛盾するが、これを統一的に理解するためには、内部で火をともすこととのほかに、松のような油脂の多い細木を突き刺すことを想定するしかない。そしてそれは聖婚を示唆し、死と再生を司る女神にふさわしい行為とも考えられる。このように考えた方が、単に祭りの時に火をともすとするより、祭りの所作を示唆してくれる。

このように考えてくると、大晦日の夜に志摩地方で行なわれる、大勢の青年らによって直径2mの輪を激しく空中に突き上げるゲーター祭り（写真10）や、初夏に神社で行なわれる茅の輪潜り、さらには善光寺の胎内めぐりなども、死と再生の考えが共通しているとみられ、縄文的な祭りと考えられてくる。

これらを踏まえて、縄文文化の基層文化としての位置づ

けを一層明らかにしていきたいものである。

4. おわりに

考古学において精神世界を探ることには困難がある。しかし從来からの土偶などに加えて、人面・土偶装飾付土器においてもその糸口がつかめるようになってきたのであり、個別の徹底した観察に基づいて課題の研究を深めていきたい。その地域として、山梨県が大きな役割を果たす一角を占めていることは幸いなことである。

註

- 1 a 渡辺 誠「人面装飾付の釣手土器」『比較神話学の展望』青土社 1995年
- b 渡辺 誠「人面装飾付注口土器と関連する土器群について」『七社宮』福島県浪江町教育委員会 1998年
- c 吉本洋子・渡辺 誠「人面・土偶装飾付土器の基礎的研究」『日本考古学』第1号 1994年
- d 吉本洋子・渡辺 誠「人面・土偶装飾付深鉢形土器の基礎的研究（追補）」『日本考古学』第8号 1994年
- 2 佐藤 攻『多摩ニュータウン遺跡—No.72・795・796遺跡—』『東京都埋蔵文化財センター調査報告』第50集 1998年
- 3 林部 光『金山遺跡・Ⅲ』1995年
- 4 吉本洋子・渡辺 誠「目鼻口を欠く人面装飾付深鉢形土器」『山梨県考古学協会25周年記念論文集』 2004年
- 5 雨宮正樹『社口遺跡発掘調査報告書』 1996年
- 6 坂口広太「武川村真原A遺跡住居跡の配石遺構について」『八ヶ岳考古』第12号 2004年
- 7 堀 隆也『御代田町史』史料編 2002年



写真9 御殿場遺跡例

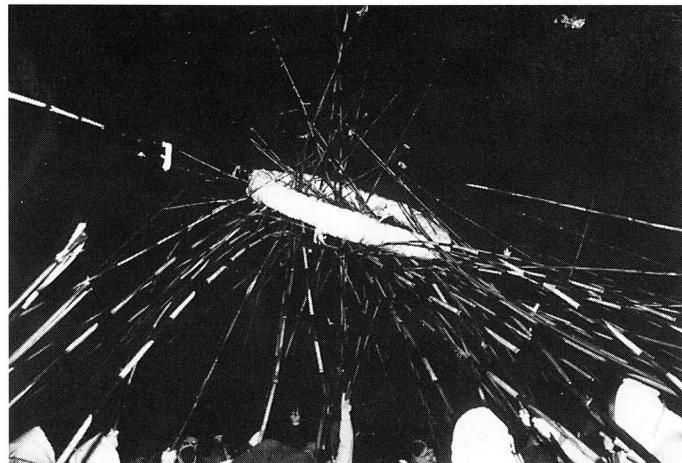


写真10 ゲーター祭り（石原義剛氏提供）

8 松永満夫他『長野県中央自動車道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』諏訪市・その3 1975年

9 井鍋誉之他『富士川S A関連遺跡』『静岡県埋蔵文化財研究所調査報告』第123集 2001年

10 宮城孝之「縄文土器時代中期の釣手土器」『中部高地の考古学』 1982年

謝辞

本稿をまとめるに際しては、次の方々から多くの御教示と御高配を仰いだ。末尾ながら銘記して深謝の意を表する次第である（五十音順、敬称略）。

雨宮正樹・飯塚政美・石原義剛・市沢英利・大倉潤・大竹憲治・小野正文・亀割均・栗野克巳・五味一郎・坂口広太・佐野隆・渋谷昌彦・竹尾進・丹野雅人・長沢宏昌・野崎進・林部光・柳沢亮・若月正巳・浅間縄文ミュージアム・静岡県埋蔵文化財調査研究所・東京都埋蔵文化財センター・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター・旧明野村境川村教育委員会・旧境川村教育委員会・旧武川村教育委員会・諏訪市博物館・富士川町教育委員会